

---

# 竜の翼

黒風

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

竜の翼

### 【データ】

N2348M

### 【作者】

黒風

### 【あらすじ】

魔導士ギルド『FAIRY TAIL』。これはソード働く魔導士たちの物語である。

## 始まり

「 いじか

俺は今、 とある魔導師ギルド『 FAIRY TAIL 』の前に立つ  
ている。

「 すいませーん」

俺はとりあえずあいさつをしてみる。

「 ん~? 何者じや? 」

一人の老人が怪訝そうに尋ねて来る。

「 あなたがマスター・マカロフですか? 」

「 そうじやがおぬしは何者じや? 何故ここに? 」

「 俺の育ての親に言われてここにきました」

「 育ての親? 」

「 はい」

「 誰じや? 」

「 『 ランディール 』と言えばわかると」

「 ー? そつかお前が・・・話は聞いておる。 これからよろしく頼む

「 はい」

今日から俺の魔導師としての生活が始まる。

## 出番い

「ガキ共、話を聞け！」

マスター・マカロフが声を張る。

「なんだよじつちゃん」

「じやますんなつて」

今のは上からナツ・ドリグールとグレイ・フルバスター。このギルドに所属している魔導士だ。ちなみに今喧嘩中。

「ウム。今日からこのギルドに仲間が増えた。せひ、あこせつじゅ

俺は自己紹介をする。

「始めてまして。ファイ・ストームフルと申します。これからここでお世話になります。よろしくお願ひします。」

「…………」「…………」

凄い歓声で迎えられた。

## 出余い（後書き）

現在の設定は幼少期です。

## 戦い

「お前強いのか？」

そう聞いてきたのはナツ。

「じゃあ俺と勝負だー！」

一  
待  
て、  
先  
に  
俺  
だ  
！  
」

グレイが割り込んできた。

「グレイ、服」

近くの女の子に注意される。

「私はカナ。よひしへね」「イジね!」アキラが口へ

ギルドの外。

なんかいきなり戦うことになつた。

一 手加減しねーからなー

モルモットの世界

## 何故マスターが合図を？

卷之五

ナツが手に炎を纏つて向かつて來た。

「火竜の鉄拳！」

俺はその拳をギリギリで避ける。

「旋風脚」

風を纏つた足で蹴り飛ばす。  
ナツは思い切り吹っ飛んだ。

「ガハッ！？や、やるなあ・・・」

ナツは苦しそうだ。

「いひなつたら・・・いくぞ、火竜の咆哮！」

思い切り息を吸い込んで炎を吐き出す。  
周りからはやり過ぎとの声も出ている。  
炎が迫つてくる。

「嵐の咆哮」

俺は口から暴風を吐き出す。暴風は炎を消し去り、ナツを吹き飛ばした。

「「「！」？」」

周りはただ呆然としている。

「嵐竜・・・だと？」

そういうてナツは氣を失つた。

「お前強いんだな！」

「うん。凄かつた！」

ナツとの戦いのあと、俺はグレイとカナと話している。

「もうかな？」

「『くら相手がナツとは』いえ、圧倒的だつたじゃねえか！」

グレイからの賞賛がハンパじゃない。

「『ひとつマイなら』『あつひ』にも勝てるな

あつひ？ あつひ？ と思つた時、いきなりドアが開いた。

そこにはナツが立つていた。

「今日は俺の負けだが、次は勝つからなー！」

「・・・楽しみにしてるよ・・・」

そのあと、軽く血口紹介が終わつた。

「なあファイ。お前も『ラゴンに斬てられたのか？』

ナツの言葉にグレイとカナも耳を傾ける。

「ああ、そうだ。」俺は答えた。そして『ここ来るまでのことをわざつ  
を話した。

「俺は『嵐竜 ランディール』に育てられた」「俺はイグニールにだ」

俺の言葉に、ナツが続ける。

「知っている。会ったことがあるからな」「！？ 本当か！？」  
「ああ。」「それで！？ イグニールはどこだ！？」  
「わからない」「なんでだ？」

俺は深呼吸して答える。

「消えたからだ」「消えたってどこに！？」「わからない。イグニールは、ランディールを迎えて来たと言っていた。どこに行くのか、なぜ行くのかは教えられないと言っていた。その時、俺の息子が『FAIRY TAIL』というギルドにいるとイグニールが言っていた。だから俺はランディールに促されて、ここに来た。」「そう・・・だったのか・・・」

ナツが落ち込んでいる。

「ランディールは俺に『またな』と言い残して行ってしまった。だから、俺はそれを信じて待つ。それまではここで頑張る」

俺はそう言つて立ち上がり、

「改めまして、ファイ・ストームフルだ。これからよろしく」

## 最強と最凶

俺がここにきて、数日が経つた。

ここはいつも賑やかで楽しい。

ナツ、グレイ、カナとも大分打ち解けてきた。

今はいつもどうののナツとグレイの喧嘩をカナと一緒に見物している。

いつもながらよくやるよなあ～等と思っていると、

「ただいま帰った。マスターはい・・・ナツ、グレイ。何をしている？」

「「H、エルザ・・・・！」」

エルザと呼ばれた緋色の髪の少女が入って来た途端、一人の喧嘩が止まつた。

凄い！マスターでも止められないのに・・・

「カナ、あの子は？」

「あれはエルザ。このギルドで『最強』の女だよ」

なるほど。なかなか強烈な睨みだもんな。

「？君は誰だ？」

エルザが俺に話しかけてきた。

「あ、ああ俺はファイ。ファイ・ストームフルだ。先日このギルドに入った。これからよろしくな」

「そうか。私はエルザ・スカーレットだ。よろしく頼む」

そういう感じで、ナツとグレイの喧嘩が再開された。

「やめんか一人共！」

二人にエルザの拳が炸裂する。  
やるな・・・エルザ。

その時、入り口からまた違う声がした。

「エルザー！この前の続きをや！」

「ミラか・・・よし、かかってこい！」

エルザと、今入ってきたミラと呼ばれた少女が戦い始めた。

「もうお姉ちゃんったら・・・帰ってきたばかりなのに・・・  
「ほんとにもう・・・」

ミラへと一緒に帰ってきた少年と少女が呆れています。

「お帰り、リサーナ、エルフマン。」

隣の力ナが二人に話し掛ける。

「ただいま力ナー・・・? その人は?」  
「俺は・・・」

エルザのときと同じように自己紹介をする。

「私はリサーナ。よろしくね」

「僕はエルフマンだよ」

「それで、今戦ってるのはミラ姉ちゃん」

二人の戦いを指差して言つ。

カナ曰く、『最凶』の女だとか・・・納得。

「あいつら・・・特にエルザ。あれでよく俺達に言えるよな

「本当だぜ・・・なあファイ。あいつらぶつ飛ばしてくれねえか?」

グレイが俺に言つ。

「もしかして、この聞言つてた『あいつら』って・・・」

「そうだ、頼む!お前なら余裕だろ?」グレイが言つた瞬間、物凄い殺氣が飛んできた。

「グレイ・・・聞き捨てならんな・・・」

「私らが負けるって?なめんじやないわよ!」

グレイのせいで俺が怒られる。

そしてそのまま一人と戦うこと・・・

なぜかエルザとミラと戦うことになつた俺。ギルドのみんなが氣の毒そうな顔で見ている。はあ～・・・

「始めるぞ」  
「覚悟しな」

エルザは換装して黒羽の鎧を身に纏い、ミラはサタンソウルで俺に迫つてくる。

「障風壁」

俺は風の盾を作り出す。

二人は風に押し戻される。それでもエルザは剣で、ミラは爪で風を切り裂き、向かつてくる。

「風纏斬手」

両手に風を纏つて刃状にして一人の攻撃を止める。そして風の刃を一人の喉元に突き付ける。

「はい、おしまい」

俺は風を消して、ギルドへと戻る。

「待てっ！もう一度戦え！」

エルザは負けを認めたみたいだが、ミラは諦めていなによつだ。

「あー・・・また今度な?」

そう笑いかけると、//リは赤くなつた。

「なつ／＼／＼ふ、ふやけんな!-!」

そう言つてこりうりに、俺は帰つた。

あれから三ヶ月が経つた。いろんな人に会つた。

まずはラクサス。

あいつと会つたとき、まず第一声が「俺と戦え」だった。とりあえず戦つてみたら、難無く勝つた。それからというもの、毎日のように勝負を挑んで来る。あまりにもしつこいから一度半殺しにしたら、ラクサスはビビつて近寄つて来なくなつた。マスター曰く、ラクサスが人に怯えたのは初めてだという。

それから、ミストガンとギルダーツ。

ギルダーツはふざけたオッサンだが、このギルドで俺より強い人間のひとりだ。安請け合いで戦つたら、見事に負けてしまつた。ミストガンは何度かギルドには来たのだが毎回眠らされてしまうので、まだ一度しかちゃんと会つていない。かなり無愛想な人だつた。

他のみんなとも円満だ。

歳が近いナツ達とは、特に仲がいい。

そして俺と話す時、なぜか力ナとミラは顔が赤い。風邪かと思ってグレイに氷を頼んだら「鈍感・・・」と言われた。何のこと?

そして今俺は、町外れの森でナツに滅竜魔法を教えている。属性は違うが、原理は一緒なので問題は無い。

「火竜の翼撃！」

ナツが木に向かつて技を放つた時、その木から大きな卵が一つ落ちてきた。

「なんだこれ？」

「わからない。とつあえず持ち帰つてみるか」

「おう、お帰り……つて何持つてんだ？」

「森で卵が落ちてたんだ」「でかしたナツーみんなで食おうつてか？」「

「いやだ！これはドーラゴンの卵だ！絶対孵すんだ！」「ドーラゴン…？」「

？本当なのか？」「

「いや、わからない。ナツが勝手に言つているだけだ」「

「だって、この辺の模様が竜も爪みたいだぜ」「

「いや、無理がある……」

「とにかくじつちやん！」この卵孵してくれよ…」

「馬ッ鹿モソ！命を冒瀆するでない。命は「愛」から生まれるもん

じゃ！孵したければ、愛情を注ぐ！」とじや

「愛情を注ぐ？」「

「マスター。ナツにはまだ難しいだらつ」「

「そうじやな」「

「と、とにかく、大事に育てればいいんだろ？」「

「ナツ、私も一緒にいい？」「

「いいだ、リサーナ」「

ナツとリサーナは一人でどこかへ行つた。

「じゃあ俺はどしそうかな……」「

「私が手伝つてあげるー」「なつ、力ナシのこそ。私も『ミラ、お

前は仕事があるだろ？」「つ、くうー……」「

エルザの言葉に、ミラはかなり落ち込んでいる。

(そんなに卵が育てたいのか?)

そんなことを思いながら、俺は力ナと卵を育て始めた。

## “幸せ”と“幸運”

俺と力ナは森の中で卵を育てることにした。  
見つかってからで育てた方がいいという力ナの判断だ。

「早く生まれないかなあ」「そんなすぐには、生まれないだりつ」  
などと他愛ない会話をしていた。

その時、

「グワアアアアア！」

「！？今何？」

「わからない。ちょっと見てくるから！」……」「ファ、ファ  
イ！後ろ！」

振り向くとそこには大型モンスターが。

「う、ラクリマジロだと…？」

そのモンスターはラクリマジロだつた。  
ラクリマジロは体を丸めて、襲い掛かってきた。

「くつ、障風壁」

風の盾を出すが、受けきれずに弾き飛ばされる。

「ファイ！」

「大丈夫だからそこにはいる！」

そういうつて再び対峙する。ラクリマジロが再び向かってきた。

「嵐纏斬手」

手に暴風の刃を纏つて切り掛かる。そして、相手の勢いを殺したところ

「嵐竜の咆哮ー。」

ラクリマジロは暴風を受けて、倒れた。これで一安心。やつと思つていると

「ファイ、早く! 卵が・・・」

力ナに呼ばれて戻ると、卵が奮え、ヒビが入った。そしてそこから生まれたのは・・・

「・・・猫?」

全身真っ黄色の猫だった。

「ふあー・・・ん? 誰?」 「しゃ、喋つたー?」 「

なんと猫が喋つたのだ。

「お前・・・喋れるのか」 「うん。で、誰?」

「俺はファイ」

「私は力ナだよ。あなたは?」

「生まれたばかりだもん、名前なんて無いよ」

「そりやそつか。うーん・・・ギルドに戻るまでに決めるか

「ギルド?」

「ああ。俺達の家族がいるところだ。早く行くぞ」

ギルドの前まで行くと、何やら歓声が上

がっている。「やつたー！ドラゴンが生まれたー！」

「いや、猫でしょ？」

「あい！」

「凄いね。みんな笑顔だよ！」

「ああ。よし、お前は今日からハッピーだ！」

「あい！」

「楽しそうなところだね」

「ああ。今日はいつもより楽しそうなんだな、お前は運がいい。・・・

そうだ」

俺は閃いた。

「お前の名前はラッキーだ！」

「いい名前だね」

「はいです」

二人とも賛成してくれた。

「これからよろしくな、ラッキー」

「はいです！」

“幸せ”と“幸運”（後書き）

次からは時間が飛びます。

名前：ファイ・ストームフル

幼少期に森をさ迷っているところを、嵐竜『ランディール』に拾われる。

ランディールのもとで育ち、嵐の滅竜魔法を扱う滅竜魔導士となる。ある日、ランディールはファイのもとを去つた。その時に、『FAIRY TAIL』に行けと言い残した。

ランディールの言った通りに『FAIRY TAIL』に行き、そこで生活をしている。

年齢はエルザやミラと同じ年。

性格はめんどくさがりやで、仲間想い。誰にでも優しいが、キレると手がつけられない。

滅竜魔導士なので、自分と同じ属性のものを食べて自らを強化できるが、「風」ではなく、嵐のよつた「暴風」でなければ効果は得られない。

ギルドのマークは左手の甲にある。

色は緑。

巷では「切り裂く翼」<sup>スリッショウイング</sup>という通り名で呼ばれている。ちなみに、結構なイケメンで、ファンだけでギルドが一、二、三つ作られるとも言われている。

ルーシィ（前書き）

本編に入ります。

## ルーシィ

### Sideルーシィ

ヤツホー！みんな。私ルーシィ！

一応、魔導士です。

ギルドには入つてないケドネ。

私は今、アコガレのギルド、『FAIRY TAIL』を田舎しています。

その途中、『魅了』<sup>チャーム</sup>っていう魔法に騙されそうになつたところをあ  
る人に助けられて、今その人にお礼に昼食をおじつてるんだけど・・・

「いやー悪いな。メシなんかおじつてもらつて」

「あい！」

「い、いえ・・・お気になさらず・・・」

食べ過ぎ！そしてはねすぎ！

あつ、今のはさつき助けてくれた人で、名前はナツ。それと、なぜ  
か喋る猫のハッピー。にしても、よく食べるわねえ・・・

「にしてもお前、こんなところで何してんだ？」

「え？あ、私一応魔導士なんだ。だからギルドに入ろうと思つて・・・  
・あつ、そうだ。『FAIRY TAIL』って知つてる？スッゴ  
い魔導士がたくさんいて有名なんだ。私もそこに入りたいんだけど、  
やつぱに入る条件とか厳しいのかな？」

「「ガツ、ガツ」

き、聞いてないし・・・

「ま、ま、私はそろそろ行くね。じゃあ「おひくつ

ナツ達と別れてから少しして、またあの男に会つた。

「おや、君はさつきの・・・」

「あー、アンタはさつきの・・・あんな卑怯な魔法で女の子達を騙す  
なんて信じられない!」

「まあそんなことは置いておいて、僕とパーティーにでも行かない  
かい?」

「誰があんたなんかと一緒にいてよ!私は『FAIRY TAIL』  
に行きたいんだから!」「ん?なんだ『FAIRY TAIL』に  
入りたいのかね?それならば丁度いい。この僕が歓迎しよづじやな  
いか!」「え!/?アナタ『FAIRY TAIL』の魔導士なの!」  
!?」「『火竜』<sup>サラマンダー</sup>って聞いたことないかい?」

「えつ、あのお店じゃ買えない火の魔法を操るつていう・・・」

「そうだよ。だから君もパーティーに来るといい。僕の仲間も歓迎  
してくれるよ

「じゃ、じゃあお言葉に甘えて~

「ふつ、ちゅういもんだな・・・」

## ルーシィ（後書き）

最初はルーシィサイドで始まります。  
それと、原作は知っていても完全には覚えていないので、とにかく  
ころオリジナルでいきたいと思います。  
のちのちオリキャラなども出でてきます。

## Sideルーシ

私は今、ボラさん主催の船上パーティーに来ています。

「やあ。楽しんでくれてるかな?」

「はい。あの、これが終わったら、本当に『FAIRY TAIL』

に入れてくれるんですよね!?」

「ああ、もちろんだ。僕が保障しよう!」

「よかつた〜・・・」

数十分後。

私が船を歩いている時。

「今回も上出来だな」

「ああ、そうだな。しかし楽な仕事だよな。女共をパーティーに招待して、そのまま売りさばくなんて」

えつー?どうこう」と?

と、とりあえずボラさんに聞かなきゃー。

「ボラさん!」

「ん?どうかしたのかね?」

「さつき聞いたんですけど、このまま人身売買に行くつて・・・」

「ー? そうか、聞かれてしまったか・・・ならば仕方ない。お前た

ち、この女を閉じ込めておけ

「「はつ！」」

「えつ？ちょ、ちょっとボラさん！…どうじつ」とですか…？」

「どうもじつも、君がさつき言つた通りだよ。人身売買の会場に着くまで、少し大人しくしていてもらおつ」

そんな・・・・せつかくアコガレの妖精の尻尾に入れるとと思つたのに・・・

バコーン！！！

「！？な、何だ！？」

いきなり天井に穴が空いた。

そこから誰か入つて來た。

「ナ、ナツ！？」

「なんだね君は？」

「妖精の尻尾の魔導士つてのはどこのどいつだ？」

「なんだ・・・俺達に何か用か？」

カツ、カツ・・・

ガシッ！

「俺は妖精の尻尾のナツだ。お前何か知らねえぞ！」「何！？本物だと！？」

あつ、本當だ！あのマーク・・・

「ちつ、お前たち、やつてしまえ！」

「「「ウオー……」「「「あとでかかってきやが……オニー・・・」

「ナ、ナツー?」

「ナツは乗り物に弱いんだよ」

あ、ハッピー……何で羽生えてんのー??

「ハッピーそれは「今のうちだーやつちまえー」ちょ、ナツー。「ぐはつー。」

ナツが危ないーよし、いつなつたり……

「開け、宝瓶宮の扉。アクエリアス!」

私は鍵を使って星靈を呼び出した。

「アクエリアス、この船を港までもどして!」

「ちつ」

「ちよつとおー今「ちつ」って言つたかしらあー……」「いちにちつるさい。そんなんだから彼氏が出来ないんだ

「ちよつとおー今は関係ないでしょーー早くしてー」「ちつ、オラアアアー!」

アクエリアスが水を操つて船を動かす。だけど……

「ちよつとー?私たちまで巻き込まないでよー。」

「不覚・・・船まで流してしまった・・・」

「私たちを狙つたのー?」

「つるわー。これから彼氏と旅行だ一週間は呼ぶな。彼氏と、な  
「一回言つなー!」

アクエリアスは帰つて行つた。

「痛た・・・よくもやつてくれたな・・・喰らえ、プロミネンス・  
ウイップ!」「ナツ!？」

ナツが紫の炎に包まれた。

「ボラ・・・『プロミネンスのボラ。』四年前、巨人の鼻を追放さ

れた魔導士だね」

ハッピーが冷静に言つ。

「ちよつとー? そんな悠長のこと言つてる場合じゃないでしょ! !  
ナツが・・・」

「大丈夫。ナツに炎は効かない」

「えつ?」

「どうこいつ」と?と思つてナツを見ると・・・

「炎を食べてる! ?」

「・・・竜の肺は焰を吐き、竜の鱗は焰を纏つ・・・これは自らの  
体を竜へと変換させる古代魔法。ナツは滅竜魔法の使い手だよ。」

「・・・喰つたら力が沸いてきた・・・いくぞ」

ナツは大きく息を吸い込んだ。

「火竜の咆哮!」

そして口から勢いよく炎を吹いた。その姿はまるで、

「火竜・・・」

凄い! 凄いんだけど・・・

「せこ興味ナーナー」

港は全壊・・・とまではいかないけど、ほぼ半壊している。

「！？マズイ！逃げるぞ！」

わあー・・・凄い大事だなあ・・・

「つてか何で私まで！？」「？だつて妖精の尻尾に入りたいんだろ？だつたらついて来いよ！」

「え？ うん…！」

あ  
い  
!

52

## 妖精たち

Sideルーシ

私は今、念願の『妖精の尻尾』の入り口にいる。

「本当に来たんだ……」「あつたりまえだろー? さあ、中に入ろうぜ」

「あい」

妖精の尻尾内

「たつだいまー!」

「オウ、ナツ、おかげ「つテメエ! イグニールの情報、嘘だつたじやねえか!」ブヘツ!!?」

そんないきなり殴りかからなくても……ってか大丈夫かしら。机とか壊れてるケド……

「おつナツ! 帰つてたのか。よし、この間の続きをや!」

「グレイカ……上等だ、かかつてこい!」

いきなり喧嘩始めてるし……ところより何でパンツ一丁!?

「お前等、何をしている」

あ、何か学ランの人が止めに入るみたい。

「漢なら拳で詰らんかあ！！！」

結局喧嘩あ！！？？

邪魔だあ！！」

4

弱一  
！！！

卷之三

金くれりやあせりわね たく 落ち着いて酒も飲めやしなし

「本日、いわゆる困り事やうねえ」

酒を樽で飲んでいる女性と、女性を数人連れている男が言った。

・・・ 本 ま い な ふ 二 飛 ん で る な あ ・・・

「またくもう、しうがないわねえ……といふであなたは？」

誰かが話しかけてきた。つてこの人、グラビアで有名なミラジュー  
ン！？凄い、こんな人に会えるなんて・・・

卷之三

「おかえりなさい、ハッピー。あなたは？」

「あ、は、はい。ルーシィといいます！妖精の尻尾に入りたくて来ました！」

ね

「こつものなんですか？」

「まだまだ序の口よ。まだそこまで激しくは……あ、始まるみたい  
いね」

辺りには魔法陣が展開している。

「ま、魔法ーー!!」危なくないですかーー?」

「大丈夫。すぐ終わると思……」

「アゴシ……

「!!」

何かの破片がぶつかって!!が倒れた。

頭から流血してるし……

つてこいつか!!れじやギルドがもたないんじや……

「何が凄いことになつてるね」

「ああ。こつものことだが、このままじやギルドが崩れそつだしな……」

・

何や!!外から男と女の話しが聞こえた。

「冗談よ、どうするの?」「とつあんて止める

そつて黙のまゝ手をかざし、

「抑風」

と唱えた。すると、

「グハツ！」

「ウオ！」

「ウツ！」

つと、みんなが床にはいつくばりだした。

「あれだけの人数をいとも簡単に・・・

いつたい何者！？

マイ（前書き）

すみません。遅くなりました。

## マイ

「久しぶりだな・・・」

「最近忙しかったからね」「はいです」

俺は一ヶ月ぶりにギルドに帰ってきた。

ちなみに一緒に居るのはラッキーと妹分のソラだ。

「とりあえず、中に入るか」

「兄さん、なんだか騒がしくないですか?」

「ああ。どうせいつもみたいにナツたちが暴れてんだろ?」

ソラとラッキーは納得する。

「つひも、このままじゅ、ギルドがもたないしな・・・」

俺は考へる。

「どうするんですか、兄さん」

「とりあえず止める」

俺はギルド内部に手をかざし、

「抑風」

と呟えた。

するとみんなは床にはいつくばつた。

少ししてから俺は技を解いた。

「お前ら、暴れるのはいいが、ほゞほゞにしておけ。」  
「お前ら、暴れるのはいいが、ほゞほゞにしておけ。」  
「お前ら、暴れるのはいいが、ほゞほゞにしておけ。」  
「お前ら、暴れるのはいいが、ほゞほゞにしておけ。」

「お前ら、暴れるのはいいが、ほゞほゞにしておけ。」  
「お前ら、暴れるのはいいが、ほゞほゞにしておけ。」  
「お前ら、暴れるのはいいが、ほゞほゞにしておけ。」

グレイの質問にそつ返す。

「ファイ！」

「よひ、カナ。久しぶりだな」

カナが「ひひに走つてきた。

「ファイ～・・・グペッ！」

俺に飛びついてきたカナを、ソラが蹴り飛ばした。

「痛つた～・・・ちょっとソラ、何すんのよー」

「それはこつちのセリフです。『安く兄さんに触れないで下せー』

「・・・・・・」

カナとソラ、一触即発の危機。

「つたぐ・・・お前ら、喧嘩すんなよ・・・」

俺はそういうて二人の頭に手を置く。

「 」

「 ． ． ． 」

ソラは喜んで、カナは顔を赤くしている。

「 カナ、大丈夫か？顔、赤いぞ」

「えつ！い、いや、何でもない／＼／＼」

「 いいなあ～・・・」

ミラが嫉妬して、物欲しそうな目で見てしている。

「 ミラ、ミラさん？あの人は・・・」

ミラの隣にいる女性がミラに何かを聞いている。

「えつ！あ、彼はファイ。ギルド内で一、二を争つ実力者よ。『切り裂く翼』『スラッシュウイング』って言ったほうがわかりやすいかしら？」

「え！あの人ガ、あの有名な・・・」

俺はミラたちの所へと行く。

「そんな有名じやねえよ。それよりもミラ、彼女は？」

「あ、はい！あの、私ルーシイって言います！このギルドに入りました！」

「そりか。俺はファイだ。よろしくな、ルーシイ」

俺はそう言つて、微笑みながら手を差し出す。

「つーーあ、はい・・・／／／

その瞬間、ルーシィの顔が赤くなつた。熱でもあんのかな？

Side ルーシィ

「そうか。俺はファイだ。よろしくな、ルーシィ」

そつぱりファイさんは手を差し出してきた。

「つーーあ、はい・・・／／／

その時の微笑んだ顔に、思わずドキッとしてしまつた。顔が赤くなつているのが、よくわかる。

しかも、周囲の視線がかなり痛い。隣にいるリラさんとか、殺氣が尋常じやない。

ファイさん、人気あるんだな・・・

Side out

「つーても、ギルド加入とかは、マスターに聞かねえと・・・

とかなんとか言つてると・・・

「ガキども、静かにせんかあ！ー」

マスターが丁度良く現れる。

「まゝた評議員から苦情が来とるぞ・・・」

そう言つてマスターは資料の束を読み上げる。

「グレイイ！まゝた街の中を裸で歩きあつて！しかも今回は下着泥棒の苦情まで来とるぞ！」

「グレイ・・・」

「いや、だつて裸はまずいだろ？」

「まず脱ぐな」

「・・・はい」

「次にカナ！酒を樽で十二個も呑み、しかもその分の請求先は評議員！」

「ばれたか・・・」

「カナ、呑むのもほどほどにしておけ」

「う、うん・・・」

「オ、オウ！」

「エルフマン！要人の警護中に要人を殴るなど言語道断じゃ！」

「い、いや、だつて、『漢は学歴』なんていうもんだから・・・」

「んなもん、聞き流しておけ」

「オ、オウ！」

「口キ！主に女性問題で、数々の芸能事務所等から損害賠償請求が来とる！更には評議員のレイジ老師の孫娘にまで手を出しあつて！」「しようがないよ。みんなが可愛いながイケナイんだから」

「その女癖はどうにかしろ」

「・・・はい・・・」

ナツ!

「オウ！」

「『オウー』じゃないわい!! ハルジオンの港の半壊、そのほかにも街を二つ半壊! やりすぎじゃや!!」

「仕方ねえだろ！アツい戦いだつたんだから」

「ソラ！お前のせいで山火事がおきて、山が一つ全焼じゃあ……」

「もう一つこけぬと思つたんだけどなあ

「  
う  
?」  
—

「海のど真ん中での戦いの影響で津波が起き、半径五?いないの街

「おお、何がどうだ？」

「黙れ！毎度毎度怒られるワシの身にもなつてみろ・・・・！じゃが・

手に持つた書類を燃やし、

「詫議員など、クソ喰らひやじゃ——！」

「魔法とは、つねに自由な発送の元で生まれ、進化してきた。ガキども！つまらんルールや法に縛られるな！」己のルールと仲間を信じ

11

「す、凄い・・・」

「ああ。ウチのマスターは、他とは格が違つ  
「ん? おヌシ、何者じや?」

「ん？ おヌシ、何者じや？」

「え？ あ、はい、ルーシィと言います！ · · · あの、私を妖精の尻尾に入れてください！！」

「ん、いいぞ」「

「早っ！」

「まあ、こういう人なんだ···とにかく、これからよろしくな、ルーシィ」「

「はい！」

## ファイ（後書き）

ソラについては後々プロフィールを載せます。

ストーリーがまともないので、更新、遅くなりそうです・・・

だがしかし！メゲズにガンバリマス

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2348m/>

---

竜の翼

2010年10月17日03時46分発行